くまもと障害者労働センター通信
ウィズ ～ともに～
WITH
復刊 第81号
2025.11.22
since1985
おれんじ村
発行：社会福祉法人 くまもと障害者労働センター　〒861-8039 熊本市東区長嶺南１-５-４０
TEL:０９６-３８２-０８６１　FAX：０９６-２８５-７７５５　http://1985orange.com

共同連大会くまもと～お礼～

きらない！わけない！ともにはたらく！
共同連
共同連大会 in 熊本

『おれんじ村・エコネットみなまた・共同連だいたい40周年記念全国大会 in くまもと』と題し、3 団体の 40 周年を祝い記念大会を熊本の地で開催できたことは、私にとって意味深いものになりました。

私が共同連と出会ったのは、1986 年第 3 回差別と闘う共同体連合（現：共同連）大会を熊本で開催した時でした。「差別と闘う」という言葉に惹きつけられて参加しました。大会に参加した私は、障害者が地域で働き暮す姿を示していくことが、障害者差別をなくすために大切なことだと知りました。また、全国に共生共働の社会を目指す仲間がたくさんいること、そして仲間とつながる事が出来ました。

養護学校を卒業した障害当事者３人が集まり自立生活を目指し、働く場所として「おれんじ村」を作りました。初代代表の池田大輔さんが、水俣から無農薬の甘夏みかんを仕入れて販売していたことが、おれんじ村という由来となりました。当時のおれんじ村も全国の作業所も今のような事業者に対しての補助制度もありませんでした。もちろんヘルパー制度もありませんでした。障害者が地域で働き生きることが難しい状況の中、なんとか地域の人達と関わりを作り、行政交渉を繰り返し、さまざまな制度を要求してきました。40 年の中で、何度も解散の危機に陥りながらも、共同連の仲間が支えてもらいました。共同連との出会が、現在のくまもと障害者労働センター（通称：おれんじ村）へとつながり、熊本の地で 40 年間という長い間、共生共働を目指す活動を訴え続けることができています。障害当事者と健常者が対等に働く場を創造する。そして、地域の中に生活できる場所創造するという理念が今も脈々と引き継がれています。

40 年たって今、おれんじ村では医療的なケアを必要とする障害者も活躍しています。どんなに重い障害があっても、働きたいとの思いを大切にしてきたから実現できました。

私たちは、働き方を仕事に合わせるのではなく、個々の特性や得意なことにあわせて仕事を作り出してきました。これこそおれんじ村が 40 年続いてきた強味だったと思います。それと同時に労働センターは、他の差別問題や市民運動に関わって来ました。

これからも誰もが自分らしく生きていける共生共働の社会を目指し、駆け抜けていきます。記念すべき共同連の第 50 回全国大会が熊本の地で開催されることを願い、明日からも変わらず日々おいしいお弁当、お菓子作りを通して、みなさまの元へ笑顔をお届けしていきます。

きらない！わけない！ともにはたらく！
共同連
共同連大会 in 熊本

共同連 パフォーマンス大会

とても大事な時間

共同連全国大会初日の夜にやってきたこの時間!! そう!! 交流会!!
そして、
待ちに待ったパフォーマンス大会!!
ほぼみんなが汗だくになって
踊り、歌い、楽しむ時間！
コロナで自粛を余儀なくされたここ数年。
やっと熊本で解禁になりました！

各地区の精鋭（?）たちが、この日のために準備してきてくださった歌や踊りや演奏や漫才やマイクパフォーマンスや仮装を披露してくださいました。
みんなすごかった!! ほんと楽しかった!!
言葉では、どう表していいかわからないので、写真をどうぞ!!

私は、この時間がとても好きです。
何でかって？それは、居心地がいいから。

違和感だらけの前職を離れ、おれんじ村に入職して十数年。
障害があろうがなかろうが、お互いが１人の人間で、一緒に働く同僚でありたい。
そう思いながらも、どこかで支援者（職員）として…ってなっていないかな。
って、相変わらず迷子になっている私。

そんな私の指標になっているのが、共同連であり、汗だくになって踊り、歌い、楽しむパフォーマンス大会です。

ここには、支援者だから…とか、
障害者だから…の垣根がなく、
パフォーマンスが楽しければ、
一緒に混ざり踊り歌う。
会話を楽しみたい人は、会話を楽しむ。
困っていれば、近くの人が手伝う。
すごくバラバラのように見えて、お互いが尊重されている時間だから居心地がいいんです。

そんな時間を過ごすことで、やっぱり「共に働き、共に生きる」が良い!!
って、迷子から抜け出せます。

来年は宮城…遠いなぁ…と思いながら、
また参加しに行くんでしょうね…
次は、何をしようかな!!

共同連熊本大会に関わってくださった皆様。
本当にありがとうございました。

きらない！わけない！ともにはたらく！
共同連大会 in 熊本

ハプニングも思い出のうち!! にぎやか水俣ツアー

9 月 14, 15 日の一泊二日で、今年も水俣ツアーに参加してきました！

毎年恒例（?）のハプニングからスタート。出発早々からドタバタ劇でしたが、これも旅の醍醐味です（笑）。水俣に着くと、地元のあたたかい空気に包まれて、なんだか気持ちもふんわり。沈んでいた心も少し晴れていきました。

1 日目の交流会では、全国各地から集まった参加者の元気な声が響き、私の声がかき消されるほどの賑やかさ！

テーブルの上には、新鮮な魚に郷土料理、そしてごちそうの数々。目の前に並ぶ料理を見て、もう我慢できずに味見。中でもゴボウの唐揚げの絶妙な塩気が忘れられません。あれは反則級の美味しさでした…。

周りの人たちが幸せそうにご飯を食べている姿を見ていると、自然と笑顔になって、自分も同じ時間を楽しめていることが嬉しくなりました。

夜は、初めてヘルパーさんと同室での宿泊。正直ちょっと緊張していましたが、そんな心配もどこへやら。気づけば爆睡（笑）。皆さんの優しいサポートのおかげで、ぐっすり眠れました。

そして迎えた 2 日目！
空は見事な快晴。…というより、暑い !! 照りつける太陽の下、ツアーのスタートに少し乗り遅れるというオチつき。それでも、水俣の海の美しさにすべてが報われました。青く透き通る景色に癒されながら、自然の力を感じました。

ツアー後は「エコネットみなまた」でお弁当タイム。2 日間でぐっと深まった仲間たちとの時間は、笑いが絶えず、個性が炸裂。お腹も心も満たされた最高のひとときでした。

帰りの車内ではみんなクタクタでしたが、それぞれに思い出を語りながら、名残惜しくも帰路へ。

今回のツアーを支えてくださったスタッフの皆さん、本当にありがとうございました！

感謝

どぎゃんか、コーを雇いたい!!
そして、気づいたこと。

『どぎゃんか、コーを雇いたい!!』ということで、

約15年の付き合いがある働きづらさを抱えるコーを、おれんじ村で雇用しようと、
公益財団法人みずほ教育福祉財団の配食用小型電気自動車寄贈事業に応募。
そしたら、まさかの助成決定!!!!!!
配食用小型電気自動車(通称：みずほ号）を寄贈いただくことになりました。

コーとおれんじ村との出会いは、以前、相談支援でかかわったことがきっかけで、
今も秋祭り、
水俣の住宅修理など
定期的にボランティアでお手伝いしてもらっています。

15年ほどの付き合いになるコーですが、
その間、障害者雇用で企業や就労継続支援 A型で働いたもののその度に職員との関係がうまくいかず2，3年で職を転々とする状況が続いていた。

そして、もう自分は働けない。と
働くことに自信を無くし、自宅にひきこもりがちに…
職がないと収入もなく、
生活面もきびしく１日１食。
真夏の日中は図書館で過ごす。
そんな話を聞いて、
なんとか、今度はおれんじ村で支えられないかと考えていた。

約１０年前、お弁当事業を開始する時
いつか弁当事業が軌道に乗ったら
一人暮らしの高齢者や障害者など夕食に困る人の自宅へ配食サービスをしたい。
と考えていた。
あっ、これならば…、

おれんじ村の代表の倉田哲也さんが
いつも言っていること

「仕事に合わせるのではなく、
障害や特性に合わせて仕事をつくっていく。」
行き当たりばったり、無計画、出たとこ勝負みたいな感じだけど、

コーと一緒に働ける。とひらめいた!!

面倒見のいいコー。
でも、一人でできることがいい。
弁当の配達と配食サービスで自宅への個配。
コーにもってこいの仕事。

事業の計画をたて進めることは、
とても大切だけど、
働きにくさを抱える人と一緒に働くためには、
その場その場での臨機応変に事業・仕事をつくることが必要になることも。

もちろん、
働きにくさを抱える人を受入れるためには、
その人に合った仕事をつくるだけでなく、
受入れる人たちの理解も必要だったりする。

いろいろと面倒なことが増えるばかりだけど、
すんなりと受け入れてくれるみんな。
おれんじ村の人たちがいる。
僕は、そんなおれんじ村のみんなを誇りに思う。
おれんじ村で働けていることに、
心から感謝している。
コーさんの雇用をきっかけに、
おれんじ村のすばらしさを気づかされた。

みずほ号(おれんじ村での愛称：コー号）は、
お弁当を作る人、配達する人、食べる人、
みんなの幸せを乗せて、今日も颯爽と走る。
GO!!GO!!コー!!
GO!!GO!!みずほ!!

＊みずほ教育福祉財団では、
高齢者等を対象とした福祉活動支援として配食サービスを行う民間団体に、配食用小型電気自動車(愛称：みずほ号）を贈呈されています。

感謝 おれんじ村のこと
～奇跡ではない。軌跡だと。～

水俣病被害者が丹精込めて作る無農薬の柑橘類をピールに加工し、アイスクリームやケーキ類、焼き菓子を作るための冷凍庫を整備するため、『一般社団法人芳心会』に助成を応募しました!!

なんと、見事採択していただき、業務用の台下冷凍庫を整備することができました。

水俣病の問題に目を向けると
水俣病公式確認から 69 年が経とうとしている今もなお全容不明で、まだまだ裁判は続いている。被害者が自ら声を出さないと救われない社会。
それが本当に正しいのだろうか？？

多くの水俣病被害者が今もなお助けを求めて声を上げている。
しかしながら、
全国だけでなく、水俣病が発生した熊本県でも水俣病は過去の出来事となりつつある。

今回の助成では、
まだまだ被害の全容がわからず訴訟が続く水俣病の問題と障害者の就労を有機的につなぎ、新たな事業として展開するという試みである。

障害者の就労については、
特に、近年の医療的技術の進歩により
病院でしか暮らせなかった医療的ケアを必要とする最重度障害者が地域で暮らしていけるようになってきた。が…、
どんなに障害が重く医療的ケアが必要であっても働きたいと願う当事者の想いを叶える場は、まだ十分とは言えない。

いや、ほぼ皆無に等しい。

おれんじ村は約 40 年前にできた。
施設入所を拒否し、一般就労を目指すも断られ、養護学校卒業後の行き場のない障害当事者が 3 人集まり、どんなに障害が重くても地域で働き暮らしたいとの願いから、自ら立ち上げた場所である。

おれんじ村は、
ただの居場所ではない。
ただの施設でもない。

障害があってもなくても、同じ人間として対等に働く場所である。
どんなに障害が重くても働きたいという想いを実現する場所である。
働いて地域で暮らすための所得を保障する場所である。
簡単なようで、とても難しいことを目指してきた場所である。

だから、
40 年の歩みがとてもきびしかった。
何度も何度も存続の危機に瀕した。
それでも、それでもね。
たくさんの人が応援してくれて今がある。

だからこそ、
僕らは知っている。
奇跡は死んでいる。
努力も孤独も報われないことがある。

だけどね。それでもね。
今日まで歩いてきた日々を
おれんじ村では呼ぶ。
それがね。軌跡だと。

日々の活動はこちら▶

@ORANGE._CAFE
インスタはこちらから

実習「しょうがない」という六文字

今年の夏もたくさんの大学生が実習に来てくれました。熊本学園大学、熊本県立大学、熊本大学から総勢 12 名の方がおれんじ村で実習をされました。

社会福祉士の資格取得、学校の先生を目指す学生さんが、おれんじ村との出会いを通して、障害とは何か？自分の中にある差別する心に気づき向き合ってもらいました。たくさんの感想を書いてもらいましたが、今回は『つるみ』さんの感想を紹介させていただきます。

熊本県立大学　つるみ

この実習期間は私の心が大きく揺さぶられた五日間であったと感じました。最初私は障がいを持つ方に対して「怖い」という印象を持っていました。幼いころに学童保育に預けられていたのですが、そこで知的障害を持った子と関わる機会がありました。その子と一緒にいて嫌なことをされたときに「この子はしょうがないんだよ。」と言われて、私がこらえなければならないという場面が強く印象に残っていたのです。私が何をされても「しょうがない」のかな。それってすごく怖いなと子どもながらに感じました。そうやって内心とても緊張しながら臨んだ実習当日。様々な部署にわかれていて関わる人がとても多く、私は覚えられるか不安でした。しかし、部署は違ってもおれんじ村という共同体がひとつでまとまっており挨拶や声掛けが自然と交わされるのです。私が「怖い」と思っていた障がいをもった従業員の方々は実習生の私を気にかけてくださいました。もちろん全員がそうとは言えませんが、勝手に怖がって壁をつくっていた私が恥ずかしかったです。また急にうなり声をだしたり、泣いたりする方々も見受けられましたがそれはその人が「しょうがない」のではありません。理由があって、職員の方が向かい合って質問や説明をすれば心の内を伝えてくださいます。

これらのことを通して、私が子どもの頃に聞いた「しょうがない」という言葉は、一見便利なようで内実はとても冷たいものであると思いました。「障がいがあるからしょうがない」。これはいわゆる障がいのない人と障がいのある人を括って分ける考え方だと思います。そもそも障がいとは一括りにまとめられるものではありません。一人一人に得意なこと、苦手なことがあります。そんな当たり前だろうと思えるようなことにも実際に関わらないと気づけませんでした。そしてこの五日間で一緒に作業したり、お話を聞かせていただいたりして、自分の中に「怖い」という感情に隠れた差別や偏見を自覚することが多かったとも感じています。そうした自分の心に触れるたびに情けなさや恥ずかしさをおぼえました。私は障がいを持った方と関わるときに「できない」ことばかりに目を向けていたんです。でもここでは「できない」で終わらず、「できる」ことに目を向けていると思います。誰かが「できない」ことを他の誰かの「できる」ことで補い合っている。そうしてこの共同体は形成されているからこそ、皆が平等です。空いている時間にはからかいあうような談笑の場面もあって、気を張ってお互いに接している感じがしません。短い間でしたがその一員に私も入れていただけてとても嬉しかったです。

教員になってこの経験を語るのならばどのような言葉を生徒にかけよう。きっと「しょうがない」の六文字には詰め切れないだろうと思いました。

おれんじ村の皆さん、お話してくださった方々、本当にありがとうございました。

編集後記

こんにちは。もう師走ですね。今年もあと1カ月で新年ですよ。早いですね。また歳をとります（笑）学生の頃は、時間が過ぎるのが遅いなーと思っていました。どうしてでしょうね？勉強嫌いだからでしょうかね？友達と遊ぶ時間と楽しい時間は短く感じるのに…

今年を振り返れば、今年一番のおれんじ村の大イベントは、火の国熊本で開催した、共同連第40回記念全国大会inくまもとを開催しました。全国各地からたくさんの参加があり40周年を皆さま方から祝っていただきました。

今年もおれんじ村のお歳暮ギフトのご注文を受付を開始致しました。今年もお世話になったあの方に、おれんじ村のお歳暮はいかがでしょうか？ご注文お待ちしております。

来年は午年です。力強く走っていくおれんじ村をどうぞよろしくお願い致します。

ＩＴ部Ｅ